

リスク評価対象疾病についてのリスク評価（対策を優先すべき感染症の候補の抽出）（星取表）更新版

資料1-2

【本表について】

- ・公衆衛生、家畜衛生分野においては、法令により一定のリスク評価が実施されているが、生物多様性保全の観点でのリスク評価は実施されていない。
- ・本評価は、あくまでも国内の野生鳥獣の保護の観点から対策を優先すべき感染症を検討するためのリスク評価を実施したものであり、公衆衛生、家畜衛生分野等の社会的な重要性を考慮して評価したものではない。
- ・国内の野生鳥獣の保護以外の目的で、野生鳥獣の管理が必要となると考えられる感染症については、可能な範囲で備考欄に記載する。
- ・現状、我が国の鳥獣における感染症の罹患・保有状況等についての情報が限られているため、現在の既存文献等をもとに実施した暫定的な評価である。

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣（下線は希少種）*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響（症状）*5			家畜衛生		公衆衛生		OIE		備考	
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病			
1	高病原性鳥インフルエンザ	希少種	個体死	未定着	極めて高い		・ 個体群への影響 ・ 国内のマナヅル、ナベヅルの集団死事例あり（2022-2023年、1000羽以上）感染事例あり。 ・ インドでアネハヅル（約200羽）、イスラエルでクロヅルの集団死（>8000羽）事例あり（2021-2022シーズン）	国内発生中（2021-2022年シーズン）	◎	・ 鳥類：カモ類のほか、カモメ類、アジサシ類等の水鳥、猛禽類等、幅広く感染する（ツル類、ヤンバルクイナ） ・ 哺乳類：キツネ、アナグマ、アライグマ等の食肉目、ゼニガタアザラシ等の齧歯類も感染する（イリオモテヤマネコ、ツシマヤマネコ、シベリアイタチ）	-	-	◎	○	-	家畜	鶏、あひずる、うずら、きだち、ちよら、ほろほろ鳥	2類（H5N1亜型、H7N9亜型鳥インフルエンザウイルス）・4類（H5N1亜型、H7N9亜型以外の鳥インフルエンザウイルス）	○	-			
2	重症熱性血小板減少症候群（SFTS）	希少種	個体死	未定着	極めて高い		・ 個体への影響 ・ 2020年7月時点までに確認された国内のイヌ、ネコのSFTSでは、それぞれの死亡率が43%、59%。	2022年、ツシマヤマネコの野生個体で抗体陽性が確認された。国内の野生鳥獣の抗体検出状況、ウイルスを保有するマダニの分布などを踏まえて評価	○	哺乳類（ツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ、シベリアイタチ）	アライグマ、ハクビシン	マダニ	○	-	-	-	-	4類	-	-	発生時に、イノシシ、シカの個体群管理が必要となる可能性		
3	疥癬（キュウセンヒゼンダニ、ヒゼンダニによるもの）	希少種	個体死	常在	極めて高い		・ 個体への影響 ・ 野生鳥獣でも死亡することがあると考えられる ・ イリオモテヤマネコ（保護個体）で感染事例あり	タヌキで感染事例あり（2009～2017年、西日本）	◎	タヌキ、キツネ、カモシカ、イノシシ、ノウサギ、アナグマ、サル、シカ、テン、クマ、ムササビ、リス、イタチ等多くの哺乳類（アマミノクロウサギ、イリオモテヤマネコ、ツシマヤマネコ、シベリアイタチ）	アライグマ、ハクビシン	-	○	-	-	届出	めん羊	-	-	○			
4	ウエストナイル熱（流行性脳炎の1つ）	希少種	個体死	未発生	高い		・ 個体への影響 ・ 欧州や米国では猛禽類（イヌワシ、オオタカ、メンフクロウ、アメリカワシミミズク）などで感染・死亡事例あり	関係機関による侵入の警戒状況、野鳥による病原体の運搬の可能性、ベクターの存在を踏まえて評価	△	主に鳥類（特にカラス類、猛禽類、ヤンバルクイナ）。ほかにシカ、コウモリ、リス等。	-	蚊	◎	○	-	家畜	牛、水牛、馬、めん羊、豚、いのしし	4類	○	-			
5	アフリカ豚熱	その他の野生鳥獣	個体群の存続に影響を及ぼす集団死/大量死	未発生	高い		・ 個体群への影響 ・ ポーランドでは特定の地域のイノシシの個体数が90%前後減少していることが報告されている	関係機関による侵入の警戒状況、ベクターの存在、海外での発生状況を踏まえて評価	△	イノシシ	-	ヒメダニ	◎	○	-	家畜	豚、いのしし	-	○	-	発生時にイノシシの個体群管理が必要となる可能性		
6	トリコモナス症	希少種	個体死	常在	高い		・ 個体群への影響 ・ 海外では野鳥（オビオバト、ナゲキバト、フィンチ類）で死亡・集団死事例あり	・ 野鳥での報告なし。 ・ ドバト等が病原体を保有しているが、成鳥は発症しない。 ・ 愛玩鳥でみられる疾病	○	カモシカ、鳥類（アカガシラカラスバト、オガサワラカワラヒワ等）	-	-	◎	○	○	届出	牛、水牛	-	-	○			

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣(下線は希少種)*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響(症状)*5			家畜衛生		公衆衛生	OIE		備考
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病	
7	トキソプラズマ症	希少種	個体死	常在	高い		<ul style="list-style-type: none"> ・個体への影響 ・アマミノクロウサギとアマミトゲネズミで剖検の結果、死因はトキソプラズマ感染である可能性が指摘された事例あり ・ネコ科動物は通常無症状 	<ul style="list-style-type: none"> ・イエネコ(野良及び飼育個体)で抗体陽性が確認されている(2013~2017年奄美大島、2017~2018年鹿児島県徳之島) 	◎	終宿主はネコ科動物。中間宿主はイノシシ、タヌキなど多くの哺乳類、鳥類(ツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ、シベリアイタチ、アマミノクロウサギ、アマミトゲネズミ等のネズミ科、鳥類)	-	-	◎	-	-	届出	めん羊、山羊、豚、いのしし	-	-	○	
8	鳥マイコプラズマ症(M. gallisepticum, M. synoviae)	希少種	個体死	常在	高い		<ul style="list-style-type: none"> ・個体への影響 ・メキシコマシコで死亡・集団死事例あり(M. gallisepticum) 	家きんで発生あり(過去5年以内)	○	鳥類(ライチョウ、ウズラ)	-	-	◎	○	○	届出	鶏、七面鳥	-	○	-	
9	ロイコチトゾーン症	希少種	個体死	常在	高い		<ul style="list-style-type: none"> ・個体への影響 ・通常感染鳥は不顕性感染だが、エリマキライチョウ(Bonasa umbellus)のヒナで死亡事例あり 	家きんで発生あり(過去5年以内)	◎	鳥類(ライチョウ)	-	ニワトリヌカカ(Leucocytozoon caulleryi)、ブユ(L. lovati)	◎	-	-	届出	鶏	-	-	-	
10	ネコ白血病ウイルス感染症	希少種	個体死	常在	高い		<ul style="list-style-type: none"> ・個体への影響 ・一過性の感染で終結することもあるが、持続感染になると死亡率は高い(イエネコ) 	国内のイエネコのみみられる疾病	◎	ネコ科動物(ツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ)	-	-	○	-	-	-	-	-	○		
11	ネコ免疫不全ウイルス感染	希少種	個体死	常在	高い		<ul style="list-style-type: none"> ・個体への影響 ・無症候キャリア期、AIDS関連症候群を経てAIDS期(末期)になると、数か月以内に死亡する 	国内のイエネコのみみられる疾病	◎	ネコ科動物(ツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ)	-	-	○	-	-	-	-	-	○		
12	モルビリウイルス感染症(イヌ科、ネコ科。イヌジステンパーを含む)	希少種	個体死	常在	高い		<ul style="list-style-type: none"> ・個体群への影響 ・動物展示施設のトラ12頭が症状を呈し糞便からCDV遺伝子検出。12頭のうち3頭が死亡、うち1頭からCDVを分離 ・1994年セレンゲティのライオンの約30%が死亡とされる ・米国のアライグマ、ハイイロギツネ、スカンク、カナダのアライグマで地域個体群レベルの影響あり。 	国内のイヌ及びイエネコのみみられる疾病(イヌジステンパーウイルス感染症)	◎	イヌ科、ネコ科、イタチ科、クマ類、アザラシ類等(ツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ、シベリアイタチ)	アライグマ、ハクビシン	-	◎	○	-	-	-	-	-	○	
13	パルボウイルス感染症	希少種	個体死	常在	高い		<ul style="list-style-type: none"> ・個体への影響 ・絶滅の恐れのあるフロリダパンサー、イベリアオオヤマネコ、ヨーロッパヤマネコでは保全上の脅威の一つ。イエネコでは一般に急性期に死亡する(ネコ汎白血球減少症) ・ミンク、フェレットでは、死亡することもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国内のイヌ及びイエネコのみみられる疾病 ・ツシマヤマネコは約1割、イエネコは約35%抗体あり(2005) 	○	キツネ、ヒグマ、タヌキ、イタチ、テン、ヤマネコ類、イノシシ、ガンカモ類等(イリオモテヤマネコ、ツシマヤマネコ、シベリアイタチ)	アライグマ、ハクビシン	-	◎	○	-	-	-	-	-	○	

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣(下線は希少種)*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響(症状)*5			家畜衛生		公衆衛生		OIE		備考
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病		
14	ネコ伝染性腹膜炎	希少種	個体死	常在	高い		・個体への影響 ・イエネコの5-12%が感染し、そのほとんどが生後12ヶ月の間に死亡する	・国内のイエネコでみられる疾病 ・ツシマヤマネコの抗体は約5%、イエネコは12%(2005)	○	ネコ科動物(ツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ)	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
15	ネコカリシウイルス感染症	希少種	個体死	常在	高い		・個体への影響 ・通常は急性経過で治癒するが、重篤な肺炎で死亡するものもある(イエネコ)	・国内のイエネコでみられる疾病 ・ツシマヤマネコは約2割、イエネコは84%抗体あり(2005)	○	ネコ科動物(ツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ)	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
16	ネコウイルス性鼻気管炎	希少種	個体死	常在	高い		・個体への影響 ・二次感染した場合、重篤な気管支肺炎や副鼻腔炎となり死亡することもある(イエネコ)	・国内のイエネコでみられる疾病 ・ツシマヤマネコの抗体は約2%、イエネコは72%(2005)	○	ネコ科動物(ツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ)	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
17	狂犬病	希少種	個体死	未発生	ある		・個体への影響 ・発病後平均3日以内に死亡のデータあり(イエネコ、イヌ)	関係機関による侵入の警戒状況を踏まえて評価	△	すべての哺乳類	アライグマ、ハクビシン	-	-	◎	○	-	家畜	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊、豚、いのしし	4類	○	-	発生時にアライグマ、ハクビシンの防除強化が必要となる可能性
18	パストレルラ症(出血性敗血症、家きんコレラを含む)	希少種	個体死	常在	ある		・個体群への影響 ・鳥類の集団死事例：韓国のアカツクシガモなど、中国・内モンゴルのアカツクシガモ、セイタカシギ、ソリハシセイタカシギ、アオアシシギ等	わが国でも種々の鳥類に発生がみられているとの情報から「ある」とした。過去5年間における具体的な発生事例の情報は確認できなかった。家きんコレラの発生は1954年以降なし。	○	カモシカ、シカ、オオコウモリ、ニホンザル、鳥類、げっ歯類等(ガンカモ類、ツル類、シギチドリ類)	-	-	◎	○	-	家畜	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊、豚、いのしし	-	○	○		
19	ニューカッスル病(高病原性ニューカッスル病、低病原性ニューカッスル病)	希少種	個体死	常在	ある		・個体への影響 ・ウヤハト類は高病原性NDVのレゼルボアと考えられている(北米)が死亡例もある	・過去5年の間に高病原性NDVの発生なし(家きん) ・低病原性NDVの発生あり(2022年10月家きん)	○	鳥類(ウ、ハト類、ハクチョウ類等)	-	-	○	-	○	家畜	鶏、あひる、七面鳥、うずら	-	○	-		
20	サルモネラ菌感染症(サルモネラ症、家きんサルモネラ症、羊・山羊のサルモネラ症を含む)	希少種	個体死	常在	ある		・個体群への影響 ・スズメ目で大量死事例あり	5年よりも前に国内のスズメで感染事例あり	◎	哺乳類、鳥類(スズメ目の鳥類)	-	-	◎	○	○	家畜/届出	鶏、あひる、七面鳥、うずら(家きんサルモネラ症)／牛、水牛、鹿、豚、いのしし、鶏、あひる、七面鳥、うずら(サルモネラ症)	-	○	○		

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣(下線は希少種)*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響(症状)*5			家畜衛生		公衆衛生		OIE		備考
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病		
21	ニパウイルス感染症	希少種	個体死	未発生	ある		・個体への影響 ・イエネコで死亡例があるほか、感染実験で呼吸器系の合併症を伴う急性熱性疾患が観察されている ・Pterotus属のオオコウモリが自然宿主とされるため、日本のオオコウモリ類への影響は小さいと考えられる。	関係機関による侵入の警戒状況を踏まえて評価	-	オガサワラオオコウモリ、クビワオオコウモリ、イリオモテヤマネコ、イノシシ	-	-	○	-	○	届出	馬、豚、いのしし	4類	○	○		
22	野兔病	希少種	個体死	常在	ある		・個体への影響 ・野生ネズミ・ウサギ類は、感染すると大部分が敗血症で死亡する	5年よりも前に東北地方のノウサギ(2008、2009)とツキノワグマ(2009)で抗体検出あり	◎	ネズミ類、ノウサギ、ムササビ、リス、イノシシ等の哺乳類や鳥類(アマミノクロウサギ、げっ歯類)	-	ダニ、カ、アブ等	◎	-	-	届出	馬、めん羊、豚、いのしし、うさぎ	4類	○	-		
23	マレック病	希少種	個体死	常在	ある		・個体への影響 ・鶏：発症しないことが多いが、発症した場合、慢性型が死亡率10%以下、急性型は死亡率10~50%	5年よりも前に国内のガンカモ類から検出事例あり	○	鳥類(ガンカモ類)	-	-	○	-	-	届出	鶏、うずら	-	-	-		
24	あひるウイルス性腸炎	希少種	個体死	未発生	ある		・個体群への影響 ・海外でガンカモ類の集団死事例あり	関係機関による侵入の警戒状況を踏まえて評価	-	ガンカモ類(ガンカモ類)	-	-	◎	○	-	届出	あひる	-	-	-		
25	兎出血病	希少種	個体死	未定着	ある		・個体への影響 ・致死率はRHDVで40~90%、RHDV2で5~70%	2002年及び2019年~2020年に散発的に国内の動物展示施設で発生あり。	-	ウサギ類(アマミノクロウサギ)	-	-	○	-	-	届出	うさぎ	-	○	-		
26	兎粘液腫	希少種	個体死	未発生	ある		・個体への影響 ・アナウサギでは、発病後2週間以内に死亡。強毒ウイルスによる急性感染の場合は、発病後48時間以内に死亡。	関係機関による侵入の警戒状況を踏まえて評価	-	ウサギ類(アマミノクロウサギ)	-	-	○	-	-	届出	うさぎ	-	○	-		
27	ペスト(エルシニア症。Yersinia pestis)	希少種	個体死	未発生	ある		・個体への影響 ・ネコ科動物で感受性高く、敗血症など種々の症状を呈する ・げっ歯類は突然死あり	関係機関による侵入の警戒状況を踏まえて評価	-	げっ歯類、ウサギ目、ネコ科、イヌ科、イタチ科、シカ、カモシカ(ツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ、シベリアイタチ、アマミノクロウサギ、げっ歯類)	-	ノミ	◎	-	-	-	-	1類	-	○		
28	マラリア(人のマラリアをのぞく)	希少種	個体死	常在	ある		・個体群への影響 ・スズメ目の鳥類の多くは無症状で原虫を保有しているとされるが、ハワイツグミやアカハライミツスイなどの個体数減少の主な原因であると考えられている(P.relictum) ・欧州でクロウタドリ(ツグミ科)の大量死報告あり(2001と2004)	5年よりも前に国内の野鳥で鳥マラリアの感染事例あり	◎	ニホンザル、げっ歯類、コウモリ、鳥類(鳥類)	-	イエカ、ヤブカ、サシバエ	◎	○	-	-	-	-	-	○		
29	リステリア症(L.monocytogenes)	希少種	個体死	常在	ある		・個体への影響(死亡、流産)	5年よりも前に国内の野生鳥獣の感染/保有事例の報告あり	○	シカ、カモシカ、その他の哺乳類、鳥類	-	-	◎	-	○	-	-	5類(細菌性髄膜炎)	-	○		

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣(下線は希少種)*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響(症状)*5			家畜衛生		公衆衛生	OIE		備考	
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病		
30	コクシジウム症	希少種	個体死	常在	ある		・個体への影響(ツルコクシジウム) ・ツル類に寄生するEimeria gruisとE. reichenowiのオーシストが、国内のツルの越冬地(出水市)で糞便から分離されており、2000年および2003年に多くの死亡が見られた	・5年よりも前に国内のツル類で病原体の検出、死亡事例あり(左記)	◎	ツル類等の鳥類。モモンガ、ウサギ、ネズミ類、偶蹄類、食肉類等多くの哺乳類(タヌキ、マナヅル、ナベヅル、ヤンバルクイナ)	-	-	◎	-	-	-	-	-	-	-	-	
31	牛疫(モルビリウイルス感染症)	その他の野生鳥獣	個体群の存続に影響を及ぼす集団死/大量死	未発生	低い		・アフリカの大型偶蹄類では壊滅的とされる	自然界で撲滅されている	-	カモシカ、シカ、イノシシ	-	-	◎	○	-	家畜	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊、豚、いのしし	-	○	○	発生時にシカの個体群管理が必要となる可能性	
32	炭疽	その他の野生鳥獣	個体群の存続に影響を及ぼす集団死/大量死	常在	低い		・個体群への影響 ・海外では汚染地域でアフリカスイギュウやカバなどの集団死事例あり。 ・インパラやアンテロープ等の感受性の高い種では、個体群に壊滅的な影響をあたえる	・国内の野生鳥獣での発生の情報なし。過去5年間における家畜での発生もなし。	○	シカ、カモシカ、イノシシのほか、多くの哺乳類	-	-	◎	○	-	家畜	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊、豚、いのしし	4類	○	-		
33	フラビウイルス感染症(跳躍病を起こすもの)	希少種	個体死	未発生	低い		・個体への影響 ・飼育下のアカライチョウで死亡事例あり	関係機関による侵入の警戒状況(家伝法、感染症法の指定なし)、分布(イギリス諸島、ブルガリア、トルコ、イベリア半島)を踏まえて評価	-	ライチョウ、カモシカ、シカ、イノシシ、げっ歯類	-	ダニ	○	-	○	-	-	-	-	○		
34	豚熱	その他の野生鳥獣	集団死/大量死	常在(発生中)	極めて高い(発生中)		・集団死あり(国内でも一部地域のイノシシの個体数の減少が確認されているが、壊滅的な影響の報告はなし)	発生中	◎	イノシシ	-	-	◎	○	-	家畜	豚、いのしし	-	○	-	発生中。対策の一つとしてイノシシの捕獲強化が進められている。	
35	鳥結核(非定型抗酸菌症)	希少種	繁殖障害	常在	高い		・繁殖障害の報告あり	・ニワトリとあひるで2016~2019年にかけて毎年1件発生	○	鳥類	-	-	-	-	○	届出	鶏、あひる、七面鳥、うずら	-	-	-		
36	伝達性海綿状脳症(BSE、スクレイビー、CWD)	その他の野生鳥獣	集団死/大量死	未発生	ある		・集団死事例あり(CWD:カナダのオジロジカなど)	関係機関による侵入の警戒状況(家伝法の指定及び輸入検疫、飼料規制を含む対策の実施状況)などを踏まえて評価	-	シカ	-	-	◎	○	-	家畜	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊	-	○	○	CWD:発生時にシカの個体群管理が必要となる可能性	
37	小反芻獣疫	その他の野生鳥獣	集団死/大量死	未発生	ある		・絶滅の恐れのあるモンゴルサイガで集団死/大量死あり(個体数の80%減少の報告あり)	関係機関による侵入の警戒状況を踏まえて評価	-	シカ、カモシカ、イノシシ	-	-	◎	○	-	家畜	鹿、めん羊、山羊	-	○	-		

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣(下線は希少種)*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響(症状)*5			家畜衛生		公衆衛生	OIE		備考
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病	
38	アザラジステンパーウイルス感染症(海生哺乳類のモルビリウイルス感染症の1つ)	その他の野生鳥獣	集団死/大量死	未発生	低い		・集団死事例あり(壊滅的な影響の報告なし)	関係機関による侵入の警戒状況(家伝法、感染症法の指定なし)、分布(大西洋、地中海、バイカル湖)を踏まえて評価 ・北海道沖で疑似例あり(2004-5) ・北米ではトドやラッコの個体数減少の一因とも考えられている	—	アザラジ類	—	—	◎	○	—	—	—	—	○		
39	牛肺疫	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		—	カモシカ、シカ	—	—	○	—	—	家畜	牛、水牛、鹿	—	○	—	
40	口蹄疫	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		◎	イノシシ、シカ、カモシカ	—	—	○	—	—	家畜	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊、豚、いのしし	—	○	—	発生時にイノシシ、シカの個体群管理が必要となる可能性
41	流行性脳炎(ウエストナイル熱をのぞく:日本脳炎、東部馬脳炎、西部馬脳炎、ベネズエラ馬脳炎)	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		◎	鳥類、シカ、カモシカ、イノシシ、げっ歯類。その他、キツネ、コウモリからのウイルス検出あり(ベネズエラ馬脳炎)	—	蚊	—	—	○	家畜	牛、水牛、鹿、馬、めん羊、山羊、豚、いのしし	4類	○	—	
42	水疱性口内炎	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		—	シカ、カモシカ、イノシシ	アライグマ	ダニ、サシバエ、蚊、ブヨ	—	—	—	家畜	牛、水牛、鹿、馬、豚、いのしし	—	—	—	
43	リフトバレー熱	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		—	シカ、カモシカ	—	蚊	○	—	○	家畜	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊	4類	○	—	
44	ブルセラ症	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	シカ、イノシシのほか、ウサギ、イヌ科をはじめする多くの哺乳類	—	—	—	—	○	家畜	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊、豚、いのしし	4類	○	—	
45	結核	希少種	影響の可能性はあるが、個体死、繁殖障害の情報なし				・同種及び近縁種での死亡事例などの報告なし		○	シカ、カモシカ、イノシシ、ニホンザル、キツネ、げっ歯類など多くの哺乳類(アミノクロウサギ、ツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ)	アライグマ	—	—	—	—	家畜(主にM. bovis)	牛、水牛、鹿、山羊	2類(主にM. tuberculosis)	○	—	
46	ヨーネ病(非定型抗酸菌症)	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	カモシカ、シカ	—	—	—	—	○	家畜	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊	—	○	—	
47	ピロプラズマ症	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		◎	シカ、カモシカ、齧歯類(レゼルボア)、ネコ科動物	—	マダニ	○	—	—	家畜	牛、水牛、鹿、馬	—	○	○	
48	アナプラズマ症	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	シカ、カモシカ	—	マダニ	○	—	—	家畜	牛、水牛、鹿	—	○	—	

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣(下線は希少種)*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響(症状)*5			家畜衛生		公衆衛生		OIE		備考
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病		
49	豚水疱病	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		－	イノシシ	－	－	－	－	－	家畜	豚、いのしし	－	－	－		
50	低病原性鳥インフルエンザ	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		◎	カモ類など鳥類。	－	－	－	－	－	家畜	鶏、あひうずら、きだう、ちよほろ鳥	2類(H5N1亜型、H7N9亜型鳥インフルエンザウイルス)・4類(H5N1亜型、H7N9亜型以外の鳥インフルエンザウイルス)	○	○		
51	鳥インフルエンザ	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		◎	カモ類など鳥類。	－	－	－	－	－	届出	鶏、あひうずら、七面鳥	2類(H5N1亜型、H7N9亜型鳥インフルエンザウイルス)・4類(H5N1亜型、H7N9亜型以外の鳥インフルエンザウイルス)	－	○		
52	リスト疾病に含まれないパラミクソウイルス感染症(APMV-1以外の血清型のトリパラミクソウイルス)	希少種	影響の可能性はあるが、個体死、繁殖障害の情報なし				・死亡の報告なし(APMV-5についてはセキセイインコで高い致死率)		○	鳥類(ガンカモ類、シギチドリ類、スズメ目、ハト類、ツバメ類、スズメ類など)	－	－	－	－	－	－	－	－	－	○		
53	ブルータング	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	シカ、カモシカ	－	ヌカカ	－	－	○	届出	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊	－	○	－		
54	アカバネ病	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	カモシカ、イノシシ、シカ	－	ヌカカ	－	－	○	届出	牛、水牛、めん羊、山羊	－	－	－		
55	悪性カタル熱	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	シカ、カモシカ、イノシシ	－	－	○	－	－	届出	牛、水牛、鹿、めん羊	－	－	○		
56	チュウザン病	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	カモシカ	－	ヌカカ	－	－	○	届出	牛、水牛、山羊	－	－	－		
57	ランピースキン病	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		－	－	－	－	－	－	－	届出	牛、水牛	－	○	－		
58	牛ウイルス性下痢	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	カモシカ、イノシシ、シカ	－	－	－	－	○	届出	牛、水牛	－	○	－		
59	牛伝染性鼻気管炎	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	カモシカ	－	－	－	－	－	届出	牛、水牛	－	○	－		

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣(下線は希少種)*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響(症状)*5			家畜衛生		公衆衛生		OIE		備考
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病		
60	牛伝染性リンパ腫(牛白血病)	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	カモシカ	—	—	—	—	—	届出	牛、水牛	—	○	—		
61	アイノウイルス感染症	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	カモシカ	—	ヌカカ	—	—	○	届出	牛、水牛	—	—	—		
62	流行性出血病ウイルス感染症(イバラギ病)	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	カモシカ	—	ヌカカ	○	—	○	届出	牛、水牛	—	○	—		
63	牛流行熱	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	シカ、カモシカ	—	ヌカカ、蚊	—	—	○	届出	牛、水牛	—	—	—		
64	類鼻疽	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		—	シカ、カモシカ、イノシシ、げっ歯類	—	—	○	—	—	届出	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊、豚、いのしし	4類	—	—		
65	気腫疽	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	シカ、カモシカ、イノシシ	—	—	○	—	—	届出	牛、水牛、鹿、めん羊、山羊、豚、いのしし	—	—	—		
66	レプトスピラ症	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	ネズミ類、キツネ、サルのほか、シカ、イノシシなどほとんどの哺乳類(多くが保菌。)鳥類も保菌。	アライグマ	—	—	—	○	届出	牛、水牛、鹿、豚、いのしし、犬	4類	—	○		
67	牛カンピロバクター症	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	カモシカ	—	—	—	—	○	届出	牛、水牛	—	○	—		
68	トリパノソーマ症	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		—	カモシカ	—	アブ、サシバ	—	—	—	届出	牛、水牛、馬	—	○	—		
69	ネオスポラ症	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	タヌキ、キツネ、カモシカ、シカ	—	—	—	—	○	届出	牛、水牛	—	—	—		
70	牛バエ幼虫症	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		—	カモシカ	—	—	—	—	—	届出	牛、水牛	—	—	—		
71	ヘンドラウイルス感染症(馬モルビリウイルス肺炎)	希少種	影響の可能性はあるが、個体死、繁殖障害の情報なし				・死亡の報告なし(オオコウモリは一般に無症状と考えられる)		—	オオコウモリ(ダイトウオオコウモリ、エラブオオコウモリ、オガサワラオオコウモリ)	—	—	—	—	—	届出	馬	4類	—	○		

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣(下線は希少種)*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響(症状)*5			家畜衛生		公衆衛生		OIE		備考
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病		
72	OIEリスト疾病に含まれない ポックスウイルス感染症(牛 丘疹性口内炎、伝染性膿疱性 皮膚炎、鶏痘を含む)	希少種	影響の可能性は あるが、個体死 、繁殖障害の情報 なし						◎	鳥類、シカ、カモシ カ、イノシシ、ウサギ 類、リス類、ネコ科、 げっ歯類等(オジロワ シ、オオワシ等の鳥 類、アマミノクロウサ ギ、イリオモテヤマネ コ、ツシマヤマネコ)	-	-	-	-	-	届出	牛、水牛 (牛丘疹 性口内 炎)／ 鹿、めん 羊、山羊 (伝染性 膿疱性皮 膚炎)／ 鶏、うず ら(鶏 痘)	-	-	○		
73	ナイロビ羊病	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						-	カモシカ	-	マダニ	○	-	○	届出	めん羊、 山羊	-	○	-		
74	羊痘	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						-	カモシカ	-	-	○	-	○	届出	めん羊	-	○	-		
75	マエディ・ビスナ	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						○	カモシカ	-	-	○	-	-	届出	めん羊	-	○	-		
76	伝染性無乳症	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						○	カモシカ	-	-	○	-	○	届出	めん羊、 山羊	-	○	-		
77	流行性羊流産	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						-	カモシカ	-	-	-	-	○	届出	めん羊	-	○	-		
78	山羊痘	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						-	カモシカ	-	-	○	-	-	届出	山羊	-	○	-		
79	山羊関節炎・脳炎	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						○	カモシカ	-	-	-	-	-	届出	山羊	-	○	-		
80	山羊伝染性胸膜肺炎	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						-	カモシカ	-	-	○	-	-	届出	山羊	-	○	-		
81	オーエスキー病	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						○	イノシシ、シカ、げっ 歯類	アライグ マ	-	-	○	-	○	届出	豚、いの しし	-	○	-	発生時にイノシシ の個体群管理が必 要となる可能性
82	伝染性胃腸炎	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						○	イノシシ	-	-	○	-	-	届出	豚、いの しし	-	○	-		
83	豚テシオウイルス性脳脊髄炎	その他の野生鳥獣	影響の可能性は あるが、集団死 ／大量死の情報 なし						○	イノシシ	-	-	-	-	-	届出	豚、いの しし	-	-	-		

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣(下線は希少種)*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響(症状)*5			家畜衛生		公衆衛生	OIE		備考
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病	
84	豚繁殖・呼吸障害症候群	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	イノシシ	-	-	-	-	○	届出	豚、いのしし	-	○	-	
85	豚水疱疹	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		-	イノシシ	-	-	-	-	-	届出	豚、いのしし	-	-	-	
86	豚流行性下痢	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	イノシシ	-	-	○	-	-	届出	豚、いのしし	-	-	-	
87	萎縮性鼻炎	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	イノシシ	-	-	-	-	-	届出	豚、いのしし	-	-	-	
88	豚丹毒	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	主にイノシシ。その他の種々の哺乳類、鳥類。	-	-	○	-	-	届出	豚、いのしし	-	-	-	
89	豚赤痢	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	イノシシ	-	-	◎	-	-	届出	豚、いのしし	-	-	-	
90	鶏伝染性気管支炎	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	キジ	-	-	-	-	○	届出	鶏	-	○	-	
91	鶏伝染性喉頭気管炎	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	キジ	-	-	-	-	-	届出	鶏	-	○	-	
92	伝染性ファブリキウス嚢病	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		◎	水禽類、キジ科、ハト等の鳥類	-	-	○	-	-	届出	鶏	-	○	-	
93	鶏白血病	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・死亡の報告なし(臨床症状を呈するのは鶏とされる)		○	キジ、ウズラ等の鳥類(ウズラ)	-	-	-	-	-	届出	鶏	-	-	-	
94	あひるウイルス性肝炎	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	ガンカモ類(カモ・ガン・ハクチョウ類)	-	-	◎	-	-	届出	あひる	-	○	-	
95	フィロウイルス感染症(エボラ出血熱、マールブルグ病を含む)	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		-	ニホンザル、コウモリ、イノシシ	-	ヤブカ類	◎	-	-	-	-	1類	-	○	
96	クリミア・コンゴ出血熱	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		-	哺乳類	-	イボマダニ属	-	-	-	-	-	1類	○	-	
97	エキノкокクス症(単包性、多包性)	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	終宿主として主にイヌ科動物、ヤマネコ類	-	-	-	-	-	-	-	4類	○	-	

No.	疾病名	発生した場合の影響		発生の可能性		リスクに基づく対策の優先度*1	評価の根拠など		国内発生*2	影響を受ける可能性のある国内野生鳥獣(下線は希少種)*3	注目すべき外来種*4	ベクター	野生鳥獣への影響(症状)*5			家畜衛生		公衆衛生	OIE		備考
		希少種/その他の野生鳥獣	影響	常在/未定着/未発生	発生の可能性		影響	発生可能性					致死性*6	集団死*7	繁殖障害*8	家伝法	対象家畜	感染症法	リスト疾病	非リスト疾病	
112	サーコウイルス感染症	希少種	影響の可能性はあるが、個体死、繁殖障害の情報なし				・ハト類は無症状(キツネで脳炎、イノシシも死亡することがあるが、集団死の報告なし)		◎	イノシシ、キツネ、タヌキ、カワラバト(△ト類)	-	-	◎	-	-	-	-	-	-	○	
113	脳筋炎ウイルス感染症	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	イノシシ、ニホンザル、げっ歯類	-	-	◎	-	◎	-	-	-	-	○	
114	肝蛭(巨大肝蛭、巨大肝吸虫)	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		◎	イノシシ、シカ	-	-	○	-	○	-	-	-	-	○	
115	モルビリウイルス感染症(ヒトを除く霊長類)	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	ニホンザル	-	-	◎	-	-	-	-	5類(麻疹)	-	○	
116	コウモリの白鼻症候群	希少種	影響の可能性はあるが、個体死、繁殖障害の情報なし				・ヨーロッパとアジアのコウモリは感染の結果として発症することは稀といわれている		-	コウモリ類(冬眠するコウモリ類)	-	-	◎	○	-	-	-	-	-	○	
117	エルシニア症(腸炎エルシニア症、仮性結核菌感染症)	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・集団死の報告なし		○	主に哺乳類(シカ、イノシシなどの偶蹄類、げっ歯類、ウサギ類、霊長類、キツネ、タヌキなど食肉類)、鳥類など	アライグマ	-	◎	-	-	-	-	5類	-	○	
118	ニホンザル血小板減少症(サルレトロウイルス4型)	その他の野生鳥獣	影響の可能性はあるが、集団死/大量死の情報なし				・野生下のサルでの発生の報告なし ・国内、飼育下では2001~2002年に7頭発症6頭死亡。また2008~2011年に43頭発症、42頭死亡		○	ニホンザル	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	

*1 リスクに基づく対策の優先度は緑→黄→橙→赤の順に高くなる。

*2 国内発生：2000年以降、野生鳥獣での発生が報告されているものを「◎」、報告はないが家畜での発生状況を含め、国内に病原体が存在・定着していると考えられるものを「○」、日本に存在・定着していないと考えられるもの(ー)のうち、侵入リスクが高いと考えられているものは「△」とした。

*3 国内野生鳥獣(希少種)：在来の鳥類及び哺乳類を対象とした。感染する種が多い場合、上位分類群(目・科のレベル等)で記載した。希少種は国内希少動植物種を含む環境省レッドリスト掲載種のうち、CR種、EN種、VU種としたが、「すべての哺乳類」、「多くの鳥類」等、広範な分類群にわたって感染する感染症については省略した。

*4 注意すべき外来種：感染の維持や伝播に一定の役割を果たす可能性がある外来種をとりあげた。

*5 野生鳥獣への影響：分類群や種、成長段階によって感受性(病態や致死率)が異なるため、「国内野生鳥獣(希少種)」の欄に記載した種、分類群(目・科レベル)について考えられる影響を記載。

*6 致死性：国内・国外で同一の種または分類群(目または科レベル)に属する野生鳥獣での自然感染もしくは感染実験における死亡例が報告されている場合には「◎」とした。野生鳥獣における報告が確認できないものの同じ分類群に属する家畜について5%以上の死亡率が報告されているか、死亡率が高い、と言われている場合には「○」とした。

*7 集団死：調査した文献・資料で大量死、集団死、個体群への影響等の表現がみられたものを○とした。

*8 繁殖障害：野生鳥獣について情報がある場合は「◎」、野生鳥獣における情報がなくとも家畜で症状が出る場合は「○」とした。具体的には、生殖器異常、不妊・受胎率低下、死産、異常産、異常卵・産卵低下(病性鑑定マニュアル第4版の繁殖障害カテゴリーに含まれる症状)の報告があるものを含めた。